

花は土に
了(上)

連城三紀彦

はな お
花堕ちる

(上)

れんじよう み き ひこ
連城三紀彦



角川文庫 8022

平成二年九月二十五日 初版発行
平成五年六月二十日 五版発行

発行者——**角川春樹**

発行所——株式会社**角川書店**

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—

営業部(〇三)三八一七—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛に
お送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

お
花墮ちる

(上)

連城三紀彦



角川文庫 8022

目次

第一部

一章	不協和音	七
二章	燃えるバイオリン	三五
三章	花の沼	七〇
四章	落ちた靴	一〇三
五章	手懸り	一四五
六章	白い叫び	一七一
七章	A線の小夜曲	二〇九
八章	再会	二六〇

本文さし絵 奥田 瑛二

その唇は、薄闇うすやみのなかに、そこだけ淡い光に包まれて浮かびあがっている。

いや、この閉ざされた場所にはどこからも光は漏れてこない。唇それ自体が光をふくんでいるのだ——女の目にはそう見えた。

唇はかすかに弓なりの線を描き、静かに結ばれている。薄い、透き通った唇の裏に、金色の言葉を隠しているようにも見えた。

生きている間、その唇は何も語らなかった。少なくとも、女が欲しがっていた言葉は何も——。

だが、今、その唇は、今まで語らなかった言葉を、全部、一挙に吐き出すように熱く語りかけてくる。やはり隠していたのだ、私の欲しがっていた言葉をこの人は口にしたいと欲しなかっただけなのだ——女はその言葉を耳ではなく、自分の唇で聞いた。言葉の熱さは、女の唇を火のように燃やした。唇ばかりでなく、体の芯しんにも燃えあがる炎がある。

その熱さにひきずられ、女は自分の唇を、その金色の唇へと近づけていった。女には今から自分が触れようとしているのが、一つの美しい唇というより、決して許されることの

ない一つの恐ろしい罪だということがわかっていた。自分の体を燃やしているのが、ただの愛の炎ではなく、地獄の業火だということも――。

だが、その唇へと引きずられていく力を、女はもう自分の意志ではどうにもできなくなっていた。女の目に絶え間なく涙が浮かび、頬ほおをつたい落ちていく。体は燃えあがりながら、しかし、気持ちはいどく静かで、女には自分が何故こんな時に泣いているのかわからなかった。これでいい、そう思った。

今やっと、自分はその唇を手に入れようとしているのだ。そう、やっと――。

十五年経たってやっと――。

第一部

一章 不協和音

1

高津文彦のもとに、その小包みが届いたのは、妻の紫津子しづこが家を出て三日目の朝だった。前夜床とこについてからもなかなか寝つかれず、それでも寝室のカーテンの縞模様しまようがほの白い光に浮かびあがり始める頃にはいつの間にか眠りに落ちていて、それからどれだけ眠ったのか、玄関のブザーで目を覚ましたのだった。

妻が戻ってきたのだろうか――。

一瞬そう考え、高津は首を振った。

戻ってくるはずがない。

見えそうでいくら目を凝らしても何も見えない、薄い紗しゃをかぶったような、このひと月

近くの出来事のうちで、それだけは唯一確かなことだと思える。

玄関に立ったのは、郵便配達である。

「書留です、判を下さい」

事務的な乾いた声で言った。

一週間ほど前、友人から電話があり、引越しのためにレコードを五十枚ほど整理した、戦前の貴重なレコードもあるから、まとめて送ってやると言われていた。

見た目にはちょうどそれぐらいの大きさだった。受けとって手にすると、ひどく軽い。空箱のようにさえ思えた。

高津は縁側にもっていき、三日間閉めっ放しになっていたガラス戸と雨戸を開いた。春の陽光が、想像もしなかった明るさで流れこんできて、妻が出ていってからずっとその縁側に燦^{くすぶ}り続けていた闇^{やみ}と夜の匂^{にお}いを一瞬のうちに洗い流した。

陽^ひざしとともに流れこんできた風の強さも思いがけなかった。風は、寝^ひ乱れた髪をさらに掻^かき乱し、縁側と居間との境になった障子を揺るがした。ふと、その障子の中に妻が座っている気がして、高津は開いてみたが、もちろん誰もいるはずはなかった。

光に浮かび、風に掃かれて、畳目がただむなく広がっている。

庭は、春らしい柔らかい光に包まれながら、同時に激しい、針をふくんだような風に傷めつけられている。木の葉や草の緑は、風にすべてをゆだね、激しく揺れていた。春らしく穏やかなのんびりした色にふくらみながら、同時にまたその春の色をもて余し、少しで

も早く棄ててしまいたいというようだった。

高津の耳に、ふと、妻が出ていった前の晩、完成した曲の最後の音がよみがえった。この夏、東京にクラシック専門の演奏会を目的としたホールが完成する。そのこけら落としのために高津は、オリジナルの曲を頼まれていて、年が明けてからずっと、その作曲にとり組み続けていた。「天平」という、日本の古代の音を基調とした三十分ほどの交響詩である。高津としては、テーマとなる旋律も簡単に思い浮かび、イメージもどんどんふくらみ、楽な仕事運びだったのだが、三月に入り、あと一步というところで、突然ゆきづまった。「天平」という題を越え、二千年の歴史の流れにまでイメージを広げたという自負があった。そのふくらんだイメージを最後の数小節で一挙に収縮させるような結末を考えていたのだが、それにふさわしい音をどうしても見つけることができなかった。ひと月以上悩みぬき、結局、その晩、最後の一音を思いきった不協和音にすることで、曲にやっと解決らしいものを与えたのである。

ふと耳を掠めたのは、その音である。

庭では光と風がそれに似た不協和音を奏でていた。

高津はその音とまだ頭の芯に粘膜のように貼りついた眠気とをふり払うように、首を振り、小包みの箱に手を伸ばした。

宛て名の筆蹟にも、「石塚民江」という発送人の名にも心当りはなかったが、箱に十字にかかっている麻紐の結びめをほどこうとして、送ってきたのは紫津子なのかもしれない、

そう思った。

いや、間違はなく紫津子だ。一見、ひとりでにでも解けそうに軽く結んだだけのように見えながら、結びめの芯に硬くしっかりしたものがある。

それは確かに十五年の妻の癖である。

結婚するひと月ほど前に二人で初めてホテルへ泊ったことがある。紫津子は正装のような華やかな着物をまとい、いつも以上に肌は白く綺麗に浮きたって見えたが、高津のほうには、徹夜の仕事が続いて、髭ののびた、汗くさい荒れた肌をしていた。先にシャワーを浴びようとするのを、

「今の高津さんの方が、こういう部屋には合ってるわ」

静かな微笑とそんな言葉とで制め、紫津子は自分から帯をほどき、着物を脱ぎ、肌襦袢一枚の姿になって、ベッドに横たわった。紫のシェード越しの燈もピンクのベッドカバーも似合わない白い横顔だった。高津は腰紐に手を伸ばしたが、すぐにも解けそうな結びめはいくら指先に力を籠めても、柔らかくなくてくれない。

「咬んだほうがいいわ——」

弱っている高津の指に、紫津子はそう声をかけた。その、紫津子にしては珍らしい投げやりな声と、もう既に行がが終わったあとのように疲れたものを滲ませていた横顔の視線とを、高津は十五年経った今も忘れられずにいる。

結局、紫津子は十五年間変わらなかったのだ——。

そう思いながら、高津は、その小包みの麻紐を鋏はさみをもってきて断った。ダンボールの箱を開くと、ビニール袋が出てきた。透明なビニールだが、水蒸気のようなものに曇っている。

それを破ると、もうひと重ね、濡れた新聞紙で何かが包まれていた。

濡れた新聞紙は、二重にも三重にもなっていて、簡単には剥はがせなかった。手触りだと、包みこまれているものは、ひどく軽く柔らかく、壊れやすそうに思える。丁寧に少しずつ剥がそうとするのだが、濡れた紙はすぐに破れてしまう。焦り、苛立ちいらだ、高津の指は思いついて力まかせに、紙を引き裂いた。

その瞬間である。大きな紙の裂けめから、何かが溢あふれだし、と同時に吹きこんできた風に舞いあがった。白い無数の塵ちりのようなものは、花火のように空に広がった。

高津は慌てて戸を閉めた。

風は突然やんだが、まだ残っている空気の流れに、しばらくその塵は漂いながら、やがてゆっくりと、高津の肩や膝ひざへと、降りしいてきた。

見るだけでも簡単にわかったが、高津はその一つを手にとってみるまで、それが桜の花だとは、今自分の体を一瞬襲ったのが花吹雪だとは信じられなかった。いや、手にとり、目を凝らしてみても、それは現実の花というより、幻のようにすぐにも消えそうに見える。花片は居間の畳の上にも降りしいている。蕾つぼみのまま開ききっていないものもあれば、今開いたばかりのように花の形を保っているものもあるが、大半は今の風が強すぎたのか、

花片を零し、萼だけを残している。萼からは、どれも細い糸のような枝が短く伸びている。ちょうど高津が小包みを解いた時、花が開いているようにと、ふくらみきった蕾を濡れた紙に包んで、それは発送されたのだろう。ひと晩、夜汽車か貨物列車の闇に揺られながら、花は枝から離れながらも、必死に生命を開こうとしていたのだろう。

それを妻が送ってきたことは間違いないかった。一瞬舞った花吹雪に目を奪われて、すぐには気づかなかったが、新聞紙の破れめから、溢れだした花とともに和紙の封筒が出てきたのである。花の塵の中に落ちてゐるそれを拾いあげると、「高津様」と細い墨字で書かれている。確かに妻の筆蹟だった。

中に夫への手紙が入っているようだったが、しっかりと糊づけされた封印を、高津はすぐには切らなかつた。まだ突然の花吹雪に襲われた衝撃が消えずにいる。妙にぼんやりした頭で、高津はこの時、ふっと二月の一夜のことを思い出していた。

まだ作曲の仕事が順調に進んでいた二月半ばの夜である。ピアノを叩くのに疲れ、高津は二時頃には布団に入った。この時、紫津子は既に隣の布団で眠っていたのだが、すぐに眠りに落ちた高津は、しばらく経って、ふと人の気配のようなものを感じて目を覚ました。枕もとのスタンドの薄い燈に照らされて、布団の上に起きあがった紫津子の背があった。「どうしたんだ」

声をかけながら、霞んでいる目には紫津子のまよっている寝巻が白すぎる気がした。何故白すぎるのか、その理由に気づくまでに高津は数秒を要した。

寝巻は二人の布団の間の畳に脱ぎ棄てられ、紫津子は素肌になっていた。凍りつくような真冬の寒い晩である。もう長い間、そんな風に使っていたのか、肌は、白というより、蒼ざめ透き通って見える。肩のあたりの、一段と蒼く翳った肌を、髪が細いすじをひいて庇っている。

初めて結ばれた頃は、外へと光を放つようだった白さは、十余年が過ぎ、この一、二年、内へと沈みこむような、淋しい翳のある白さに変わってきている。齡をとるとともに着る物が地味な色になっていくのは、決してただの慣習ではなく、肌の変化にともなうてごく自然に似合う色が変わっていくためだということが、男の高津にも実感としてわかった。女は着物と肌とが一緒に老けていくのだ。紫津子を抱くたびに高津は妻の年齢を感じるようになって、またそれは、高津自身の年齢となって、はね返ってくるようになっていた。

ただ、その夜の妻の肌は、高津の記憶にあるどの肌とも違っていた。紫津子の体は絵で描くなら細い毛筆で、それも薄墨のかすれるほどの線で描くのが似合うと高津は思っている。後ろから見るといっそう目立つ撫で肩の、腕へと流れ落ちる線は、ことに消えいりそうに細いのだが、そんな体の線は高津が十五年で憶えこんだ通りなのに、そこに別の、知らない女の肌があった。

薄明りと、まだ朦朧としていた意識のせいだったのかもしれない。見知らぬ女が座っているような錯覚をおぼえながら、

「どうしたんだ。寒くないのか——」

高津がもう一度かけた声に、妻は首だけをねじり、かすかな微笑で答えると、黙って寝巻をまとい直し、枕^{まくら}もとの燈を切った。

「今、夢のなかの着物を着ていたんです」

しばらくして闇^{やみ}にそんな声が響いた。

「私、夢の中でとても綺麗な着物を着ていたの。その着物を忘れないように、今、肌にとつてみてたんです」

そう言ったようだが、そんな妻の言葉を、高津はまた自分の夢の中で聞いている気がして、すぐにまた眠りに落ちてしまった。

それきり忘れたまま、一か月が過ぎ、先月の半ば、「あの晩の着物が仕立てあがってきたわ」妻はそう言って、一枚の着物を高津の前で羽織って見せたのだった。

暗紫色というのか、紫に濃い墨色を溶かしこんだような色の着物である。ところどころに地の色を薄めたような色で、桜の花が描かれている。花は光線の加減で、はっきりと浮かびあがったり、また、地の色に紛れこんで消えたりする。

胸と裾^{すそ}の二か所に、一つずつ薄い紅色になった花がある。それがなければ、一見喪服と見間違えそうな暗い着物だった。妻は、「夢の中で見た通りに染めあがったわ」そんなことを嬉^{うれ}しそうな声で呟^{つぶや}いた。

「ずいぶんと淋^{さび}しい着物じゃないか」

「ええ、——だって、とても淋しい夢だったから」

言葉とは逆に、楽しそうな微笑を見せて、妻はそう答えた。ただ高津は、ちょうど作曲の仕事が厚い壁に突き当たっていた時期だったから、その着物のことも交わした会話のこともほとんど無視し、すぐに忘れてしまったのだが、今から思うと、その夢の着物の一件は、このひと月妻が見せた不思議な言動の最初のものだった。

それからまたひと月が過ぎ、季節が冬から春に移り、まだ三日前、短い書き置きを残し、妻は、その着物を着て、家を出ていったのだった。高津が眠っている間に出ていったのだが、その着物を着て出ていったことは間違いなかった。妻が出ていったあと、たんす筆筒の抽き出しの隅まで改めてみたのだが、失くなったとわかるのはその着物と、妻がよく持ち歩いている真珠色のビーズのバッグだけだった。

大して気にもとめずほとんど忘れてしまっていたはずの着物の花模様が、今、周囲に散乱している花に触発されるのか、ひどく鮮やかな輪郭で、高津の頭によみがえってくる。

風が絶え、ガラス戸越しに流れこんでくる陽ざしはいっそう穏やかに柔らかくなっている。その陽ざしに映えて、縁側に降りしいた花片は光の屑くずのように燦きらめいてさえ見える。その花を目では追いながら、しかし、脳裏によみがえってくる暗色の花のほうが、はるかに生々しく感じられた。高津は手にした封筒の封を切ることも忘れ、長い時間ぼんやりとその場に座りこんでいたが、やがて電話のベルが聞こえたので立ちあがった。

妻からかもしれない。

そう思ったが、受話器から流れだした声は別の女のものだった。